学位（修士・博士）論文要旨

論文題目 対応困難な事例にしないための対象理解の構造
——在宅療養患者への地域包括支援センター保健師の支援過程の分析を通して——

Keywords: 看護 生活過程 退体経緯 対象理解 対応困難

本研究の目的は、地域包括支援センターの保健師として関わった対応困難事例との支援過程を分析して、なぜ対応困難になるのか、対象理解をどのように深めていけばよいかについて、明らかにすることである。

研究方法は、地域で対応困難とされた1事例および、対応困難化の可能性がある3事例、計4事例の退体過程記録を研究資料として、「対象の事実」「保健師の理解」「保健師の言動・事態」の欄を持つ研究資料フォーマットを作成し研究資料からキーセンスを当該欄に記入し研究資料とする。分析は、研究資料フォーマットに「保健師の理解特徴」、「そのときの想定像」、「全体像を描く際の位置づけ」の分析を行ない、保健師の理解特徴が自分の位置にいるか他者の位置に移っているかを指摘して「保健師の理解特徴」欄に（自分の位置）または（他者の位置）を記入し、その時の想定像を思い出して「そのときの想定像」欄に記入し、それらの理解を全体像を描く際の位置づけをし当該欄に記入する。次いで事例ごとに「対応過程の現象」、「その理解」、「保健師の理解特徴」を抽出し、各事例の対象理解の構造を明らかにする。4事例の対象理解の構造を比較検討し、共通構造を抽出し研究結果とする。

研究結果：研究資料は4事例、計12事例となった。各事例ごとの対象理解の構造は、A【その人の強い個性を感じた場合には、長い生活過程のすべてを一貫した存在としてとらえ、自己の主体像をも重ねながら相手の立場での退体経験を描り返すことで対象の顔の中が見られるようになる】、B【想定的障害の原因をつぎとめたい場合、障害をもつていたその人の人生をしっかり押さえ、症状があらわざるを得ない状況への退体経験を描り返すことで、自己の主体像をも重ねてその生活をつくりだしている相手の立場をうかがうために退体経験できるようになる】、C【認知症の人とかわる場合、健康時から発症、現在に至るまでの生活変容をふまえて健康の段階を把握しつつ、対象がどのような世界をみているかの主体像をも手掛かりしながら退体経験することで、相手の位置に移行でき、気持ちのありようや変化を感じ取れるようになる】であった。これらの対象理解の構造を比較検討し抽出された共通構造は【対象の主体像を描いて相手の立場での退体経験を描り返すことができる中で、対象が健康時から発症、現在までの生活変容を重ねた存在として見えた時、自己の主体的な主体像を重ね合わせ相手の理解と近似的な像を感情として描くことで、相手の位置に移行でき、相手の気持ちを感じ取って三重の関心を注げるようになる】であった。

結論：上記の対象理解の共通構造に加え、それを実践に生かすための条件として以下の2点が見いだされた。

1. 常に実践方法論に沿って三重の関心をもってかかわり続けることで相手からのSOSにいち早く気付けるセンスを養いつつ、相手の立場での退体経験が相手の位置に移行したものとなるように、自己の主体像を重ねて相手の理解を近似的な像を感情として描く訓練を積む。

2. 地域で支援活動を行う看護師は、対象と直接かかわらない時間の隔たりや生活空間の広がりについて、生活過程の見えない部分を増した事実を科学的理論に導かれた対象理解の共通構造に沿って描きだし、より早く相手の位置への移行ができるよう、自己の実践を振返りながら訓練する。

指導教員氏名（自署）：
平成23年2月14日

宮崎県立看護大学大学院
研究科長 薄井 坦子 様

学位論文（修士・博士）審査委員
主査 氏名（自署） 薄井 坦子
副査 氏名（自署） 大倉 裕子
副査 氏名（自署） 新田 なつ子
副査 氏名（自署） 渡野 魔文

学位論文審査及び最終試験の結果報告書
このたび、審査委員会として、学位論文（修士・博士）の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

<table>
<thead>
<tr>
<th>学生氏名</th>
<th>猪狩 祐</th>
<th>学籍番号</th>
<th>0833001</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>看護学専攻</td>
<td>理論看護学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>成績評価</td>
<td>学位論文</td>
<td>合格</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>論文題目</td>
<td>対応困難な事例にしないための対象理解の構造</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>審査要旨</td>
<td>本研究は、地域包括支援センター保健師の在宅療養患者への支援過程の分析を通して</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

予備審査では、実践の全容や研究過程を訪ねて必要な材料の提示に欠けていて質疑応答に時間を要したが、実践内容と研究の意図が評価され、実践を導いた保健師の認識の構造分析を事実的・論理的に進めることを求められた。

本審査では、4事例13場面をもとに、各事例への保健師の対象理解への転換点を見いだしてその認識の特徴を浮き彫りにし、対象一認識一表現の過程的構造を抽出し、4事例の共通構造から、地域で生活する患者を対応困難な事例にしないための対象理解の構造を論述した点で、論理看護学上価値ある研究として認められた。

なお、対応困難事例の概念規定と対象者の選定理由を明らかにし、分析過程を資料上で明示することによって、論文の完成度を上げるよう助言された。